『航米日録』巻一～巻五の漢字について

浅野　敏彦

1

ジャパンナレッジのサイトにある電子化された『国史大辞典』（吉川弘文館）は、「幕末維新期」の項目を「天保期に入ると」で書き始めている。ペリーが浦賀にやってくるのが 1853（嘉永 7）年であり、1830 年に始まる天保期からを幕末として論を進める。この時代に生まれた人々が次の明治を担っていくことになる。福沢諭吉、新島襄という大学の創始者もそうした人の一人である。彼らの語彙と、彼らの次に出てきて、明治という時代の文化を後世まで伝える人々、たとえば、森鷗外、夏目漱石の語彙の連続と非連続とを探ることで、明治という時代を語彙の面から考察することができるのではないか。それは、時代的な語彙の層の違いとして捉えうることでもあろう。

本稿は、上に記した問題意識をもって、幕末における象徴的な出来事である海外見聞記の一つである『航米日録』を取り上げ、その巻一から巻五までに記された漢字とそれによって表記された語についての若干の調査報告である。

『航米日録』の著者、玉虫左太夫は、林家の門に入り「学力を認められて」[1]師の代行をも勤めるが、後に江戸仙台藩邸の学問所に寓居して、江戸にいる仙台藩の青年の監督などを務めた経歴の持ち主であり、漢籍の深い知識を有していたと思われる。また、同時代の人々がそうであったように中国近世語（白話語）にも通じていた[2]。その点では、同時代の武士階級の人々と比べて特異な存在ではなく、彼の使用した漢字は、この時代の武士階級の人々に共通するところが多いと考えられる。

2

今回の調査は、『日本思想大系』所収の全八巻からなる『航米日録』の巻一から巻五である。巻八は次に示すように、他の巻と違った性格を持つ巻であり、見聞記としては巻七までと考えると、今回の調査は全体の七割を対象としたもの[3]になる。

> 予扈従ノ間時ニ臨ミ事ニ触レ、大ニ心ニ感ズル所ニシテ、諱忌ヲ避クベキ者アリ、亦直ニ之ヲ記ス。今再ビ考校シ来リテ之ヲ視ルニ、公然之ヲ言ハ固ヨリ不可ナリ、全然之ヲ削去ルモ亦惜ムベキヲ覚ユ。此ニ因テ別ニ之ヲ抄出シ、此一巻ヲ得、又以テ後ニ付ス。敢テ他人ニ示スニハ非ズ。

巻一から巻五は記事の内容で言えば、出発からアメリカ東部滞在までの記事である。調査に選んだ本文が校訂本文[4]であるうえに、巻一・二・四・六・八は玉虫誼氏所蔵本、巻三・五・七は宮城県図書館所蔵本という取り合わせ本を対象とした調査であって、玉虫左太夫の漢字というテーマでの精緻な調査結果を期待してのものではない。すなわち、西洋見聞記の一つである『航米日録』の漢字の概要を知るということである。

玉虫左太夫には蝦夷地の調査報告である『入北記』もあり、調査を広げれば、彼個人の異なり字は増加するのであり、その意味でも玉虫個人の漢字を明らかにしようとするのではなく、この時代の知識人の、ある層の有していた漢字の範囲を大まかにとらえておこうとするものである。

3

電子化した本文を Basic を用いて計量した。Basic を用いたので JIS に無い漢字は、便宜的に他の漢字またはローマ字で入力した。数量的な算出はこの方法で問題はないが、漢字が表記している語の調査、異なり漢字の一覧については、『航米日録』の用いた漢字に直すことになる。次に調査の対象とした箇所を箇条書きで示す。

①巻一から巻五まで。

②各巻の冒頭にある「航米日録巻三」などの巻数を表わすもの。その結果、航・米・日・録・巻は本文にあるなしにかかわらず、度数 5 以上あることになる。また、一・二・三・四・五も度数 1 以上となる。

③底本の割り注。

④「時々・悠々・又々」などは「時時・悠悠・又又」として入力した。「々」の用いられた語の一覧は【資料 1】のとおりである。「々」を直前の漢字に置き換えなければ、漢字は延べ字数で 164 字減じることになる。

【資料 1】＊配列は JIS コード順である。

一々＝1、蓊々＝6、往々＝7、峨々＝1、奇々＝1、輝々＝1、区々＝1、巷々＝2、轟々＝1、忽々＝1、山々＝1、時々＝7、屡々＝2、寂々＝1、種々＝24、重々＝1、処々＝20、少々＝2、条々＝1、森々＝3、深々＝1、陣々＝1、青々＝2、切々＝1、戦々＝1、蒼々＝2、段々＝1、点々＝9、堂々＝1、日々＝5、年々＝3、又々＝5、万々＝2、妙々＝1、面々＝3、役々＝1、悠々＝3、容々＝1、了々＝1、連々＝6、匆々＝5、啾々＝2、喃々＝1、悸々＝2、渺々＝3、漾々＝1、濛々＝1、爛々＝9、猩々＝1、稍々＝3、蓁々＝1、鏘々＝1

上に記した基準で行った調査で得ることができた『航米日録』の異なり字数、延べ字数は【資料 2】のとおりである。

【資料 2】

異なり字数	2,287
延べ字数	50,231

校訂本文を資料に用いていることもあり、有効数値を 1 の位までと考えないで、約 2,280 種類の漢字を用いて、巻一から巻五までが書かれていると捉えておくことにしたい。平均使用度数は 21.96 である。比較に用いるには適切ではないが、延べ字数が近いということで、先に作成した資料で言えば、平安時代の漢字専用文献八種を調べた異なり字数 3,205、延べ字数 69,649 がある[5]。また、新常用漢字表の 2,136 字に近い数値である。これらと比較するかぎりでは一文献の異なり字数としては少なくはないと言える。

『航米日録』は、見聞したものを一日も欠かすことなく記録し、その日の天候についても記している書名のとおりの日記である。しかし、異なり字数の多さから見ると、公家日記のように似通ったことを記述しているのではなく、見聞することが変化に富み、左太夫の興味、関心も幅広いものであったということができそうである。このことを数値の上で見ようとしたものが、【資料 3】の、累積使用率を示したものである。

【資料 3】

ア．累積使用率	イ．使用度数順位	ウ．イに示した順位までの漢字が、異なり字数に占める割合
90.04％	775 位	33.8％
80.17	444	19.4
70.39	279	12.2
60.23	181	7.9
50.13	115	5.0

『航米日録』が、変化に富む出来事を記述した結果、多くの異なり字を用いたと書いたが、【資料 3】は、『航米日録』に使われている漢字の 33.8％ でもって、延べ字数の九割を占めていることを表わしている。この事実は、同一漢字がくり返し使われていることを表わしている。しかし、他の作品でも累積使用率の結果はおおむねこのような事実を示すことになる。前述した八種の平安時代の漢字専用文献では、上位 653 位までの異なり字数の 20.4％ の漢字で累積使用率が 80％ になるが[6]、ほぼ同時代の『扶氏経験遺訓』[7]では【資料 4】のようになる。

【資料 4】

ア．累積使用率	イ．使用度数順位	ウ．イに示した順位までの漢字が、異なり字数に占める割合
90.18%	674 位	39.2%
80.78	398	23.1
70.00	255	14.8
60.46	172	10.0
50.02	109	6.3

【資料 3】と【資料 4】とを比較すると、『航米日録』の方が、表現内容が変化に富んで豊かであることを示している。『扶氏経験遺訓』の調査対象とした巻が熱病について記述しているところであることを考えると、数多くの見聞した事柄を記した『航米日録』の数値に肯首できる。

次に【資料 5】に、『航米日録』の累積使用率が 50% になる上位 115 の漢字とその使用度数を示す。

【資料 5】 ＊順位・漢字＝使用度数を表わす。

1・一＝1017、2・十＝992、3・其＝748、4・人＝628、5・二＝581、6・大＝492、7・三＝478、8・五＝439、9・四＝406、10・中＝404、11・日＝398、12・又＝390、13・是＝380、14・此＝376、15・云＝356、16・見＝354、17・上＝347、18・後＝340、19・国＝328、20・船＝315、21・行＝302、22・度＝287、23・如＝287、24・分＝287、25・至＝284、26・風＝284、27・六＝277、28・或＝272、29・百＝269、30・七＝265、31・許＝262、32・北＝246、33・里＝244、34・以＝238、35・数＝235、36・間＝229、37・小＝225、38・房＝225、39・時＝221、40・車＝209、41・東＝208、42・我＝206、43・八＝203、44・花＝198、45・計＝197、46・処＝190、47・所＝188、48・入＝187、49・等＝186、50・右＝183、51・下＝178、52・来＝175、53・午＝172、54・晴＝171、55・前＝171、56・銀＝169、57・西＝169、58・左＝166、59・気＝165、60・円＝161、61・皆＝161、62・寒＝160、63・今＝159、64・水＝156、65・暖＝155、66・用＝155、67・外＝152、68・者＝148、69・夜＝144、70・層＝142、71・予＝139、72・能＝132、73・九＝131、74・出＝131、75・地＝131、76・砲＝131、77・少＝130、78・同＝127、79・館＝126、80・旗＝125、81・形＝123、82・向＝123、83・女＝122、84・方＝122、85・唯＝122、86・個＝120、87・子＝117、88・舟＝117、89・余＝117、90・高＝115、91・半＝115、92・多＝114、93・迄＝114、94・官＝113、95・雨＝111、96・長＝111、97・名＝109、98・室＝108、99・家＝107、100・設＝107、101・南＝107、102・木＝107、103・蒸＝106、104・傍＝102、105・年＝101、106・何＝100、107・各＝100、108・極＝100、109・正＝100、110・千＝97、111・盛＝94、112・島＝94、113・然＝92、114・旅＝90、115・故＝89

『航米日録』では、変化に富んだ内容が記される一方で日記という性質上、【資料6】のようにくり返し記述される記事があり、そこに用いられる漢字は高頻度の漢字となる。『航米日録』では、次に列挙した1～7の項目に含まれる漢字が高頻度の漢字として考えられる。

【資料6】

○寒暖計四十九度
○辰牌解纜ヨリ正午迄舟歩四十里（亜の里法）
○北緯三十四度五十分四十抄
○東経百三十九度五十分十抄
廿三日　朝晴、午後西北風猛烈、暴雨又東北ニ向フ。
（巻1、1月22日末尾から23日冒頭の記事）

1．前述したように日付が一日も欠かさずに書かれているので、少なくとも巻五までの閏三月を含んで1月18日から5月12日までの約四ヶ月分の「月・日」があることになる。
2．日本語の基本語である「それ・この・これ」という指示語を表記する「其・此・是」
3．日付、緯度、温度、見聞した物の大きさ、広さ、距離を表わす漢数字
4．相対的な位置を表わす「左・右・前・後・上・下」、方角を表わす「東・西・南・北」
5．天候を表わす「晴・雨・風（「曇」は「曇天」1例）」、温度を計る「寒暖計」、経度を示す「度・分・秒」、一日の時を表わす「朝・昼・夜・正午・午後・午前（「午前」の用例は5）」、距離の単位である「里」、長さの単位である「間」、時間の単位である「時」
6．接続詞「また・しかるに・しかれども・しからば・あるいは」を表記する「又・然・或」
7．文体上の特徴から来る「以」、記述者玉虫自身を指す一人称の「我」、日本語の基本語である「言う」を表記した「云」[8]

4

【資料5】に示した内、使用度数上位50位までの漢字で上に述べた1から6に該当しないのは、「見・国・船・行・如・至・許・房・車・花・計・処・所・入」であるが、ホーハタン号でのアメリカ訪問の航海であり、「船」「国」が使われるのも当然のことである。とすれば、上位50位の語で『航米日録』では使用度数が多いであろう必然性をもっているとはいえない漢字は、「見・行・至・許・房・車・花・計・処・所・入」である。【資料7】にこれらの漢字とその漢字が表記している語とを示す。

語表記に偏りのある漢字もあるので、各語の使用度数を漢字の下に記し、使用度数に対する％を（　）に示した。

【資料7】 ＊配列は度数順である。

・**見** 354＝みる 132（65.3）、みゆ 38（23.4）、一見 17（4.8）、遠見 8（2.3）、新見使君 5（1.4）、みす 3（0.8）、見 2（0.6）、み終る 1（0.3）、み定む 1（0.3）、見聞す 1（0.3）、独見 1（0.3）、みもの 1（0.3）

・**行** 302＝いく 131（43.4）、奉行 61（20.2）、往行 18（6.0）、行李 16（5.3）、おこなふ 11（3.6）、歩行 10（3.3）、一行 6（2.0）、啓行兵 5（1.7）、行頭 5（1.7）、通行す 4（1.3）、華盛頓行 3（1.0）、他行 3（1.0）、二行 3（1.0）、歩行道 3（1.0）、行伍 2（0.7）、行程 2（0.7）、独行す 2（0.7）、淫行 1（0.3）、横行す 1（0.3）、蟹行字 1（0.3）、行歌す 1（0.3）、行客 1（0.3）、行商 1（0.3）、行装 1（0.3）、行走 1（0.3）、再行 1（0.3）、修行 1（0.3）、十行 1（0.3）、人行亦雲霞 1（0.3）、単行 1（0.3）、南行 1（0.3）、米行 1（0.3）、米利堅行 1（0.3）、奥行 1（0.3）

・**如** 287＝ごとし 271（94.4）、いかなり 12（4.2）、如露 3（1.0）、如たり 1（0.3）

・**至** 284＝いたる 274（96.5）、いたりて 10（3.5）

・**許** 262＝許多（あまた）2（0.8）、ばかり 236（90.1）、ゆるす 24（9.2）

・**房** 225＝房室 75（33.3）、房 37（16.4）、房中 27（12.0）、別房 23（10.2）、毎房 14（6.2）、圃房 15（6.7）、右房 5（2.2）、各房 5（2.2）、諸房 4（1.8）、房数 3（1.3）、小房 2（0.9）、上房 2（0.9）、房内 2（0.9）、下房 1（0.4）、次房 1（0.4）、厨房所 1（0.4）、総房［日本の地名］1（0.4）、中房 1（0.4）、東房 1（0.4）、南房 1（0.4）、文房 1（0.4）、房外 1（0.4）、房外 1（0.4）、房上 1（0.4）

・**車** 209＝くるま 60（28.7）、蒸気車 22（10.5）、車馬 14（6.7）、車上 11（5.3）、一車 9（4.3）、小車 8（3.8）、前車 6（2.9）、二車 6（2.9）、暗車 5（2.4）、車路 5（2.4）、車道 4（1.9）、大車 4（1.9）、馬車 4（1.9）、五車 3（1.4）、後車 3（1.4）、三車 3（1.4）、車歩 3（1.4）、左右車 2（1.0）、四車 2（1.0）、車下 2（1.0）、車声 2（1.0）、車馬道 2（1.0）、車力 2（1.0）、数車 2（1.0）、両車 2（1.0）、火輪車 1（0.5）、雇車 1（0.5）、四輪車 1（0.5）、児車 1（0.5）、車後 1（0.5）、車軸 1（0.5）、車床 1（0.5）、車前 1（0.5）、車輪 1（0.5）、車銻道 1（0.5）、衆車 1（0.5）、十車 1（0.5）、乗車 1（0.5）、水車 1（0.5）、総車 1（0.5）、転紡車 1（0.5）、同車 1（0.5）、二輪車 1（0.5）、砲車 1（0.5）、傭車 1（0.5）、類車 1（0.5）、露車 1（0.5）、六車 1（0.5）

・**花** 198＝花旗人 36（18.2）、花旗国 28（14.1）、花盛頓 27（13.6）、草花 16

（8.1）、繁花 15（7.6）、花盛頓府 12（6.1）、花 10（5.1）、綵花 7（3.5）、花旗 6（3.0）、花旗国 6（3.0）、花旗船 4（2.0）、花氈 4（2.0）、仙花 3（1.5）、印花布 2（1.0）、花園 2（1.0）、花旗国人 2（1.0）、花形 2（1.0）、款冬花 2（1.0）、綿花 2（1.0）、花屋 1（0.5）、花旗館 1（0.5）、花旗国領 1（0.5）、花草 1（0.5）、花壇 1（0.5）、花地［フロリタ］1（0.5）、花美 1（0.5）、花瓶 1（0.5）、菊花 1（0.5）、盆花 1（0.5）、杞柳燕子花 1（0.5）、薇花 1（0.5）

・**計** 197＝寒暖計 140（71.1）、総計 27（13.7）、ばかり 17（8.6）、はかる 8（4.1）、豈計［あにはから］んや 4（2.0）、晴雨計 1（0.5）

・**処** 190＝ところ 141（74.2）、処処［ところどころ］36（18.9）、処処［しょしょ］4（2.1）、居処 2（1.1）、一処 1（0.5）、高処 1（0.5）、諸処 1（0.5）、制造処 1（0.5）、当処 1（0.5）、庖厨処 1（0.5）、野処 1（0.5）

・**所** 188＝ところ 72（38.3）、見所 14（7.4）、所謂 12（6.4）、所以 8（4.3）、数所 6（3.2）、製造所 6（3.2）、庖厨所 6（3.2）、売買所 5（2.7）、浴湯所 5（2.7）、休息所 4（2.1）、数ヶ所 4（2.1）、当所 4（2.1）、応接所 3（1.6）、二か所 3（1.6）、止宿所 2（1.1）、十箇所 2（1.1）、洗濯所 2（1.1）、八ケ所 2（1.1）、印出所 1（0.5）、鉛字所 1（0.5）、各所 1（0.5）、活板所 1（0.5）、観物所 1（0.5）、結髪所 1（0.5）、細工所 1（0.5）、三所 1（0.5）、手曲所 1（0.5）、所在 1（0.5）、所持 1（0.5）、所属 1（0.5）、所領 1（0.5）、乗所 1（0.5）、厨房所 1（0.5）、制造所 1（0.5）、選議所 1（0.5）、碇泊所 1（0.5）、博物所 1（0.5）、便所 1（0.5）、墓所 1（0.5）、某所 1（0.5）、紡織所 1（0.5）、本所［日本の地名］1（0.5）、名所 1（0.5）、予所携唯［漢文］1（0.5）、六ケ所 1（0.5）、浣濯所 1（0.5）

・**入** 187＝はいる 133（71.1）、でいり 18（9.6）、いり口 10（5.3）、驚きいる 6（3.2）、出いり戸 5（2.7）、いり 2（1.1）、送入す 2（1.1）、で入り口 2（1.1）、あいいる 1（0.5）、租入 1（0.5）、入魂す 1（0.5）、入札す 1（0.5）、入梅 1（0.5）、倍入す 1（0.5）、輸入す 1（0.5）、乱入す 1（0.5）、流入す 1（0.5）

なお、【資料 7】にあげた表記された語についても断りをしておく。『航米日録』本文では、例えば、「出入・驚入」となっているが、語として分かりやすいように「出いり・驚きいる」とした。しかし、「出入」は、「シュツニュウ」であるかも知れないのである。また、日本思想大系の頭注が〈汽車の停車場〉とする「火輪車行頭」（巻 4・4 月 14 日）の「行頭」は、日本思想大系の凡例によれば玉虫誼氏所蔵本に「トヒヤ」と振り仮名が付されていたものであり[9]、「ぎょうとう」という音読みにするべきものはない。こうした語形の確定までには至っていない。

【資料 7】からは、使用度数は多いが表記している語の異なり語数が少ない漢字（見・至・許・計・入）、漢字語を多く表記している漢字（行・車・所）とがある。また、「花」は、表記している語が多いが、84 例は「花旗［アメリカ］」、39 例は「花盛頓」の表記で 62.1％を占めているので「花」も表記している語の異なりが少ない漢

字と言える。「花」は、一般語を表記している漢字であるかに見えるが、『航米日録』と深く結びついている漢字であった。「所」は、左太夫が見聞した新しい建物を記述するために多用されている造語力の強い漢字として用いられていると考えられる。「計」も次の例のように、様々な事象を正確に観察しようとするところから用いられた語を表記する漢字で、『航米日録』の内容と深く結びついていた漢字であるとも言える。

・予其人員ヲ調べ見ルニ総計九人ナリ。(巻1・2月3日)
・傍ニ玻瑠窓ヲ設ク、総計二十八個。中二尺ノ処通路ナリ。(巻3・閏3月6日)
・是ヲ過ギ、又一里計ニシテ東岸ニ両三家アリ。(巻2・3月9日)
・大ナルハ高サ三尺五六寸、長サ五尺計、(巻2・3月16日)
・寒暖計五十四度(巻3・閏3月21日)

予想できたように、「如・或」は特定の語の表記にのみ使われていた。また、「許」も、玉虫左太夫が観察した物などを詳しく記そうとするところから、高さ、長さなどを記したあとに「おおよそ」の意味の「ばかり」を表記する漢字として使われていた。「房」も船室の意味での用例が多いのは、予想されたことであるので、「船」と同様除いておいてもよかったのかもしれない。以上述べたように【資料7】に示した漢字の中で、見聞記である『航米日録』という文献の性格から影響を受けることが少ないと思われる漢字は、「見・行・入」であるが、これらは、「みる・いく(ゆく)・いる(はいる)」という日本語の基本語を表記する漢字である。

上に述べたことを踏まえて言えば、【資料5】にあげた使用度数の大きい高頻度の漢字は、『航米日録』という文献の内容に関わる語を表記したり、日本語の基本語を表記する漢字であるということになるが、このことは、高頻度の漢字について一般的に言えることである。その意味では、使用頻度の低い漢字について考察する[10]ことが、玉虫左太夫の漢字ということでは適した方法であったかもしれない。今回の調査は、1で述べたように、幕末から明治初期の知識人の漢字を明らかにしようとしたことが目的にあったので、文献内において一般的な用法を持つと思われる高頻度の漢字について若干の考察を行った。

注

(1) 日本思想大系所収の沼田次郎氏の解題「玉虫左太夫と航米日録」
(2) 拙稿「『航米日録』の漢語－古代漢語と近世中国語－」[『言語変化の分析と理論』おうふう、2011年]
(3) 未校正の巻六、七の漢字の延べ字数は21634字である。巻一から巻七までの見聞が記されている本文の漢字は約71800字であり、今回の調査結果で得られた50231は71800の69.96%で、延べ字数の約七割の漢字を対象としたものになる。
(4) 凡例に「明らかな誤字・衍字等を訂正した場合、一々頭注に示さなかったものもある」と記されている。

(5) 拙著『平安時代識字層の漢字・漢語の受容についての研究』（和泉書院、2011年）161頁参照。なお、八文献は「日本霊異記・将門記・陸奥話記・尾張国解文・高山本古往来・小右記・権記・田氏家集」である。また、「日本霊異記」は興福寺本が存する上巻のみの調査である他、「小右記・権記」も一部のみの調査である。

(6) 拙著『平安時代識字層の漢字・漢語の受容についての研究』161頁

(7) 彼よりも約一〇年早く生まれた緒方洪庵の漢字について、これも全巻ではなく、本編二十五巻からなる『扶氏経験遺訓』の約二割にあたる巻一から巻五までに用いられた漢字と表記された漢語について調査したものである拙稿「緒方洪庵『扶氏経験遺訓』（巻一～巻五）の漢字」（大阪成蹊短期大学研究紀要創刊号、二〇〇四年三月）によった。『扶氏経験遺訓』は、医学書の翻訳であり、『航米日録』は、外国の見聞記であるという違いはあるが、いずれも、未知の世界を自国に紹介した点においては共通していると見ることはできる。

(8) 「言」は26で高頻度ではない。「言語・妄言・颺言・言ふ」などの漢字列を表記している。

(9) 「行頭」の付されている「とひや」は、『日本国語大辞典』の語誌では、「船で商品を扱う人の宿所で、その荷の販売斡旋をしていた「問丸」が、陸上輸送の集積所をもいうようになり、「丸」が「屋」となった。」とあるを借りて停車場としたものと考えられる。表記につかわれた「行頭」は、「卸問屋」を意味する「行」と名詞の接尾字としての「頭」（『日中大辞典増訂第二版』）を用いて「といや」を表記したものと解しておきたい。なお、「駅」は一例あるが、「武州熊谷駅の産にて予江戸にて交を結ぶ」（巻1・2月29日）で、律令制の「駅」である。「停車場」の用例はない。

(10) 『航米日録』巻一から巻五の使用度数1の漢字は、延べ字数の21.3%にあたる487字である。この487字がどのような性格を持つ漢字であるかを見る一つの手がかりとして、小学校6年間で学習する漢字と学習指導要領で定められている1006字と比較してみたい。学年ごとに定められている字種と字数については、出現順などについて異論のあるところであるが、1006字は、小学生が日常生活をしていく中で必要とされる、日常生活の読み書きに必要な基本的な漢字であると捉えて、『航米日録』頻度1の漢字と比較してみる。ただし、全体の調査に渡っていないので、未調査の巻六以降に使用例があるかもしれず、この調査はあくまでも暫定的なものとなる。未校正の巻六以降を利用して検索すると2例以上の使用がある漢字があるからである。巻一から巻五の使用度数1の漢字と小学校での学習漢字とに共通する漢字は55字ある。数字の2以上の漢字は巻六以降にも使用例があり、『航米日録』頻度1の漢字ということではない。しかし、全体を調べてもなお、頻度1のものもあり、ごく一部を参考に示すことにとどめた。「査」の使用例である「査治当」に日本思想大系が底本とした玉虫道氏蔵本には「ゲオルゲス」と振り仮名を振っている。なお、「域

＝疆域*2」は、「域」は巻一から五の範囲で表記されたのが「疆域」であること、全体では「域」は2例の使用例があることを表わしていて、「疆域」が2例ある意ではない。

域＝疆域*2、液＝樹液、駅＝熊谷駅、延＝万延元年、科＝三科*3、貝＝鮑貝、株＝（草木の）株数、漢＝癡漢*5、机＝机案、技＝其技の、宮＝宮殿楼閣*5、漁＝漁船*4、競＝互に競へ、境＝四境に達す*5、興＝時の興*3、郡＝郡名*2、欠＝用具一の欠漏なし*6、研＝研究、絹＝絹糸にて、現＝目現*9、后＝后名、康＝健康、骨＝骸骨*3、査＝査治当（ゲオルゲス）、詞＝云ふ詞なり*7、詩＝詩或は文を以て*5、誌＝玉虫誼誌す、治＝査治当（ゲオルゲス）*6、質＝性質狡猾にして*3（注記：すべて「性質」）、射＝之を射る*2

「小学校学年別漢字配当表」にあることは、小学生でもこれらの漢字を用いて書くことばがあり、ここにあげた頻度1は『航米日録』では頻度1であるが、この時代においてなじみのない漢字というのではない。

（あさの・としひこ　元大阪成蹊短期大学教授）